

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKU

2017. 7 No.93

龍吐水
中号四人



トピックス

第112回 文化財めぐり
収蔵資料の貸出

資料紹介

旧大庄屋の士族編入願 梶村 明慶

研究ノート

二つの津山藩松平家
火消行列絵巻の比較 小島 徹

お知らせ

文化財めぐりの日程
津山市史のホームページ公開



Tsuyama City Museum

津山郷土博物館

第112回 文化財めぐり



5月21日(日)に第112回文化財めぐりを行いました。今回は市内の高野本郷、高野山西地区を中心に古墳などの遺跡や地元の神社を見学しました。当日は5月にしては季節外れの30度を超える暑い日になりましたが、みなさん汗をかきながらも新緑の一日ハイキングを楽しんでおられました。

所蔵資料の貸出

岡山県立博物館へ貸出

岡山県立博物館で開催された企画展「江戸時代の岡山の学び -教育県の源流-」(会期：5月25日(木)～7月2日(日))は、江戸時代を中心に、県内各所で行われた人々の学びに関わる文化財を取り上げた展覧会でした。当館から、津山藩の藩校だった修道館の扁額など15点を貸し出しました。



博物館キャラクター
「鶴若」

みなさん
見ていただけ
ましたか。

大阪歴史博物館へ貸出

大阪歴史博物館で開催された特別展「渡来人いずこより」(会期：4月26日(水)～6月12日(月))は、近畿地方やその近隣地域で出土した朝鮮半島に関する資料で構成され、具体的な交流を描いた展覧会でした。当館からは、西吉田北1号墳出土の鉄鉗かなはしなどを貸し出しました。

旧大庄屋の士族編入願

梶村 明慶

士族編入願

族編入願願書津山藩中御編入儀御書
 其時、帰農入商、向有之場合、士族編入願

之儀、如何敷トモ、其處、以未、歳月、経過、後、日記
 漸、敢、免、又、其、以、官、手、口、指、古、う、後、マ、ミ、ノ、感、サ、ト、共
 一、家、ノ、風、紀、日、日、ナ、キ、乱、録、ノ、少、ハ、有、一、日、昔、主、自、家、我
 ラ、始、祖、先、共、同、業、立、勤、勞、ノ、如、ク、知、ル、祖、傳、業、ノ、後、(茶
 子、子、子、間、野、易、ノ、附、ノ、領、有、之、左、右、其、況、ウ、シ、
 将、来、ヲ、推、考、モ、ト、轉、々、感、慨、ノ、情、難、抑、儀、御、書、
 一、日、旧、同、僚、共、相、會、日、風、儀、ノ、維持、方、ヲ、遂、行、上、海、
 一、日、不、隔、三、様、子、孫、ヲ、訓、戒、ス、ル、要、祖、先、ノ、勤、勞、家、系
 故、事、子、子、ノ、後、立、傳、傳、ル、加、ヘ、テ、存、存、之、儀、同、主
 本、氏、以、未、祖、先、ノ、明、治、維、新、ノ、至、近、被、取、扱、方、前、記
 詳、述、ハ、天、間、改、是、御、未、要、向、士、族、編、入、破、成、一、ト
 度、家、系、相、續、ス、様、儀、其、以、未、御、書、之、依、之

願い出の理由の部分

士族編入願 (草稿)

この資料は江戸時代津山藩の大庄屋を勤めていた中島家に伝わる士族編入願の草稿です。明治34年の日付となっており、津山藩で大庄屋を勤めていた家の中から8人の連名で申請されています。

津山藩の大庄屋は、遡ると戦国時代の美作国内の国侍を先祖に持つ家が多くありますが、江戸時代はあくまで百姓として扱われていました。それは森忠政が美作国入府の際、国侍を武士として召し抱えず、百姓としたためでした。その代わりに頭百姓として他の百姓に対し優位性を与え、その中大庄屋などの要職を任命しました。その後松平家の時代となっても、その待遇は基本的に引き継がれていきます。

しかしこの草稿では、大庄屋とは単なる百姓ではなく、士分に準ずる郷士であつたことが述べられており、当時旧大庄屋達が大庄屋という立場をどのように認識していたかがい知ることが出来ます。また、これらの主張を補完するため、津山藩主であつた松平家に対し、申請者の家は士分に準じた扱いをしていた事を証明するよう願い出る草稿もこの家の資料に残されています。

このような願いが作られたのは、明治5年、明治政府が郷士家筋由緒ある者は士族に入籍することとしたためだと思われれます。ではなぜこの編入願いはこの時期に作られなかつたのでしょうか。明治6年に美作国内で同様な家柄の家の士族編入願が認められた例はあるとしつつも、草稿には「其当時ハ帰農入商ノ向モ有之場合ニテ士族編入願ノ儀モ如何敷ト差扣候」とあり、当時士族の「帰農入商」の風潮に逆らい、あえて士族編入を願い出るのはよくないと判断したためとしています。

そしてその後、明治30年代になると秩禄処分の内容に不満を持つ者の再審運動に対し、家禄賞典禄処分法、ついで家禄賞典禄処分法施行法が制定され、再審の申請ができるようになる時期がやってきます。明治34年に草稿が作られたのも、旧大庄屋達がこういった時代の変化を好機と捉えたためなのかもしれません。

大庄屋であつた家の多くは明治時代以降も地域のリーダーとして津山の産業、金融などを牽引していく存在となつていきます。すでにこの頃には士族と平民との間に制度的な格差はほぼ無くなつていましたが、そういった中であえて士族にこだわる姿の中から、旧大庄屋の家に対する自負心が見えてきます。



写真2：当館所蔵「津山藩松平家火消行列絵巻」
藩主騎馬の部分



写真1：ブリガム・ヤング大学所蔵「浅草御蔵防火隊行列図巻」藩主騎馬の部分 (Brigham Young University L. Tom Perry Special Collections)

二つの津山藩松平家火消行列絵巻の比較

—アメリカに渡った絵巻の存在判明に寄せて—

小島 徹

はじめに

5月半ばに岡山県下において新聞各紙^①でも報じられました。旧津山藩松平家が作成した火消行列絵巻「浅草御蔵防火隊行列図巻」(写真1)が、アメリカ・ユタ州のブリガム・ヤング大学付属図書館で所蔵されていることが、このたび判明しました。

この絵巻は、安政6年(1859)4月に浅草米蔵の防火番を幕府から命じられた松平家が防火のため出動した時の行列を描いて全5巻の巻物に仕立てたものです。同じ内容の絵巻「津山藩松平家火消行列絵巻」(写真2)が当館にもありますが、こちらは欠落により3巻のみとなっています(以下、区別のためブリガム・ヤング大学付属図書館所蔵の絵巻は「BYU本」、当館所蔵の絵巻は「津山本」と略記)。

BYU本の由緒来歴については、資産家のハリー・F・ブルーニングが1949(昭和24)年にチャールズ・タトル(アメリカの出版経営者で戦後に来日して古書を輸出)から購入した記録^②はあるのですが、それ以前の由来は不明です。1965(昭和40)年にブリガム・ヤング大学付属図書館がブルーニング・コレクションの大半を購入して

現在に至っています。

購入後も手付かずで埋もれていたこのコレクションは、2004(平成16)年から日本文化に関心のある教員によって紹介・利用され始め、現在では同大学准教授のジャック・ストーンマン氏が学生と共に調査研究を進めています。昨春秋に当館で開催した特別展「行列を組む武士たち」の図録表紙の画像をネット上で偶然発見した同氏からメールによる問い合わせを受け、それぞれの画像を比較するなどした結果、同じ内容の絵巻であると判明しました。

同大学では、コレクションに関する調査結果をまとめた図録の刊行を計画中のことで、今後も相互に情報交換をしながら、二つの絵巻の調査研究を進めていくことを確認しました。そこで本稿では、調査研究の手始めとして、二つの絵巻を詳しく比較検討してみます。

形態・巻数などの比較

まず、形態や巻数など外形上の特徴を比較します。絵巻各巻の天地幅については、表1のとおりです。どちらも巻物であることに変わりはないのですが、津山本は軸や巻紐の無い簡易な表装であり、作成時では

表1：二つの絵巻の外形上の比較

	津山本		BYU本	
	有無	天地幅(cm)	有無	天地幅(cm)
一番手	無	—	有	26.6
二番手	有	26.0	有	26.6
三番手	有	27.0	有	26.6
藩主出馬	有	29.5	有	26.6
附録	無	—	有	26.6
表装	仮表装		本表装	
収納箱	無 (仮の紙箱に収納)		白木の箱 (外題と同じ墨書)	

なく後年の表装のように見受けられる^④の対して、BYU本は巻物としての通常の表装で仕立てられています。

そして、津山本は現状で全3巻、いずれにも外題がありません。各巻の本紙の冒頭には「右同断／二番手御人数引取行列之図」「右同断／三番手御人数引取行列之図」「右同断／御出馬御引取御行列之図」と記されており、昨秋の特別展の開催時にも「右同断」の内容を省略せずに記載した一番手の行列図が失われたものと推測^⑤していました。

これに対して、BYU本は全5巻で、全てに「浅草御蔵防火隊行列図巻」という外題があり、「一」「二」「三」「四」「五」の巻数も併記され、第五巻には「附録」との表記も見られます。本紙冒頭の記載を確認すると、第二～四巻は津山本の記載に一致し、第一巻は

表2：供立帳・行列絵巻の順序の比較

	供立帳			行列絵巻	
	天明3年(1783)	文政12年(1829)	嘉永5年(1852)	BYU本	津山本
一番手	御留守居騎馬	御留守居騎馬	御留守居騎馬	御留守居騎馬	御留守居騎馬
	大鏡	大鏡	大鏡	大鏡	大鏡
	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬
	三間梯子	梯子	梯子	梯子	梯子
	さす又2本	龍吐水	龍吐水	龍吐水	龍吐水
	水籠	玄蕃桶2組	玄蕃桶2組	玄蕃桶2組	玄蕃桶2組
	丸水籠	中間小頭	中間小頭	中間小頭	中間小頭
	大柄杓6本	水汲中間5人	水汲中間5人	水汲中間5人	水汲中間5人
	ほて10本	御使番騎馬	御使番騎馬	御使番騎馬	御使番騎馬
	三間梯子	梯子	梯子	梯子	梯子
	大団10本	大団扇10本	大団扇10本	大団扇10本	大団扇10本
	箕20枚・蓆				
	大工	大工	大工	大工	大工
	鉦・鑼・かけや				
	作事目付	作事目付	作事目付	作事目付	作事目付
鷹18人	鷹18人	鷹18人	鷹18人	鷹18人	
御使番騎馬					
長鷹10本					
足軽18人	足軽5人	足軽5人	足軽5人	足軽5人	
物頭騎馬	物頭騎馬	物頭騎馬	物頭騎馬	物頭騎馬	
蠟燭目付	蠟燭目付	蠟燭目付	蠟燭目付	蠟燭目付	
二番手	大鏡	大鏡	大鏡	大鏡	大鏡
	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬
	三間梯子2挺	梯子2挺	梯子2挺	梯子2挺	梯子2挺
	長鎌6本				
	水籠	龍吐水	龍吐水	龍吐水	龍吐水
	大柄杓6本	玄蕃桶2組	玄蕃桶2組	玄蕃桶2組	玄蕃桶2組
	ほて6本	中間部屋頭	中間小頭	釣瓶3本	釣瓶3本
	水汲中間8人	水汲中間5人	水汲中間5人	水汲中間5人	水汲中間5人
					大団扇5本
					鷹12人
	足軽8人	足軽5人	足軽5人	足軽5人	足軽5人
	行列奉行騎馬	物頭騎馬	物頭騎馬	物頭騎馬	物頭騎馬
	足軽10人				
	大目付騎馬	大目付騎馬	大目付騎馬	大目付騎馬	大目付騎馬
	鉦・太鼓	鉦・太鼓	鉦・太鼓	鉦・太鼓	鉦・太鼓
三番手	太田房	大鏡	大鏡	大鏡	大鏡
	円居奉行	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬	纏奉行騎馬
	三間梯子2挺	梯子2挺	梯子2挺	梯子2挺	梯子2挺
	水籠	龍吐水	龍吐水	龍吐水	龍吐水
	丸水籠	玄蕃桶2組	玄蕃桶2組	玄蕃桶2組	玄蕃桶2組
	竹釣瓶6・大柄杓3				
	ほて5本	中間小頭	中間小頭	中間小頭	釣瓶3本
	水汲16人	釣瓶3本	釣瓶3本	釣瓶3本	水汲中間5人
	大団5本	水汲中間5人	水汲中間5人	水汲中間5人	大団扇5本
		鷹12人	鷹12人	鷹12人	鷹12人
	蓆				
	足軽18人	足軽5人	足軽5人	足軽5人	足軽5人
	物頭騎馬	物頭騎馬	物頭騎馬	物頭騎馬	物頭騎馬
	御用人騎馬				
	書役	書役	書役	書役	書役
自分鏡	自分鏡	自分鏡	自分鏡	自分鏡	
御家老騎馬	御家老騎馬	御家老騎馬	御家老騎馬	御家老騎馬	
御出馬	御留守居騎馬	御留守居騎馬	御留守居騎馬	御留守居騎馬	御留守居騎馬
	御道案内	御道案内	御道案内	御道案内	御道案内
	小円居2	小鏡2	小鏡2	小鏡2	小鏡2
	投鞘御槍2本	投鞘御槍2本	投鞘御槍2本	投鞘御槍2本	投鞘御槍2本
	御馬印	御馬印	御馬印	御馬印	御馬印
	御長刀	御長刀	御打物	御打物	御打物
	御馬所(藩主)	御馬所(藩主)	御馬所(藩主)	御馬所(藩主)	御馬所(藩主)
	御医師外科	御医師外科	御医師外科	御医師外科	御医師外科
	御床机持	御床机持	御床机持	御床机持	御床机持
	拍子木持	拍子木持2人	拍子木持2人	拍子木持2人	拍子木持2人
	大熊御槍	大熊御槍	大熊御槍	大熊御槍	大熊御槍
	御傘	御傘	御傘	御傘	御傘
	柳葉御槍	柳葉御槍	柳葉御槍	柳葉御槍	柳葉御槍
	御茶道・御茶弁当	御茶道・御茶弁当	御茶道・御茶弁当	御茶道・御茶弁当	御茶道・御茶弁当
	御薬筆	御薬筆	御薬筆	御薬筆	御薬筆
御替御馬					
御駕籠(藩主用乗物)	御駕籠(藩主用乗物)	御駕籠(藩主用乗物)	御駕籠(藩主用乗物)	御駕籠(藩主用乗物)	
御用取次騎馬	御用取次騎馬	御用取次騎馬	御用取次騎馬	御用取次騎馬	
御小姓頭騎馬	御小姓頭騎馬	御小姓頭騎馬	御小姓頭騎馬	御小姓頭騎馬	
御箱					
供槍10本	供槍10本	供槍10本	供槍10本	供槍10本	
供長刀2振	供長刀2振	供長刀2振	供長刀2振	供長刀2振	
薬箱	薬箱	薬箱	薬箱	薬箱	
自分鏡					
御年寄騎馬					
蠟燭目付	蠟燭目付	蠟燭目付	蠟燭目付	蠟燭目付	

「浅草御蔵火之御番／壹番手御人数引取行列之図」、第五巻の附録は「安政六己未年四月廿六日／浅草御蔵火之御番被為蒙仰候節夫々江左之通」とあります。

BYU本の第五巻(附録)について

津山本には見られない附録ですが、ここには絵巻そのものの解説とも言える文字情報が詳細に記載されており、後述する絵の内容もさることながら、附録の記載内容を確認することによって、BYU本が津山藩松平家の火消行列図であると断定できたのです。

その記載内容は、安政6年4月26日に浅草米蔵の防火番を命じられた際の家中での指示事項と、家中の火事装束の粗絵図とに大別できます。この日付で津山藩松平家は、幕府から浅草米蔵の防火番を命じられていたもので、これだけでも大きな証拠と言えるのですが、ここに記されている指示事項の文面は、幕府の命を受けた当日および翌日の松平家の「江戸日記」^⑥の記述と一致しています。ですから、この附録が総体として、BYU本の内容特定に役立つばかりでなく、津山本に描かれた行列の時期も特定された

のです。

なお、家中の火事装束の粗絵図についても、津山藩松平家文書の中に、ほぼ同じ内容の資料が含まれていることが確認^⑦できました。

行列の順序と内容

いよいよ、絵巻に描かれた内容そのものに相違が無いかを確認します。まずは、行列の順序や人物・物品の多少をチェックしたところ、全体的にはおおむね一致するのですが、前者については二番手と三番手の最後尾の騎馬とその周辺に差異(家老か大目付か)が、後者につい

ては藩主の後方の跡箱の持夫の人数に差異(2人か4人か)が見付かりました。行列の順序・内容に関しては、津山藩松平家文書の中に火消行列の供立帳が3種^⑧ありますので、それらとも比較・照合しました。その結果が表2です。

供立帳3種を比べると、文政12年(1829)・嘉永5年(1852)には大差がありません(藩主用の乗物の有無のみ)が、天明3年(1783)は他の2種と様相を異にします。端的に言えば龍吐水の有無の違いで、松平家においては天明3年(文政12年の間に火消行列に龍吐



写真6：津山本の三番手行列先頭部



写真5：BYU本の三番手行列先頭部



写真3・4：津山本の二番手（上）と三番手の継ぎ間違い（矢印の箇所）

水が加えられ、それと近い時期に行列の内容を大幅に見直したたである様子がかがえまます。

そして、供立帳と絵巻とを比べると、嘉永5年の供立帳とBYU本の絵巻がほぼ合致^⑧します。先に確認したとおり、BYU本は安政6年の防火番の行列を描いているので、幕末の10年足らずの間に内容の相違が見られないのは、不自然ではありません。しかし、津山本とBYU本との間には相違があり、津山本と合致する供立帳は存在しません。この点については、津山本の仮表装という状態を考え合わせると、仮表装時などに継ぎ間違いが起きたのではないかと推測します。表2の二番手・三番手の色塗り箇所をご覧ください。黄色どうし・薄紫色どうしの区間は順序・内容が一致します。ですから、津山本では二番手と三番手の後半部分がそっくりそのまま入れ替わっているのです。実際に、津山本のその部分には紙継ぎが見られます（写真3・4）。二番手と三番手の行列内容は似通っているのですが、混乱が生じやすいと思われるひよつとすると、仮表装前の津山本は、継ぎ目がはがれていくつかに分離していたのかもしれない。

なお、跡箱の持夫の人数は、BYU本4人・津山本2人ですが、両者ともに「御跡箱二ツ／御手廻り四人」の詞書が見られ、津山本で省略したか描き忘れたものと思われる。また、これに関連して、纏の描き方にも差異があります。一、三番手の行列先頭には大纏、藩主出馬行列の先頭には小纏があり、BYU本では先端の竿留には金色に塗られた三葉葵紋の作り物が誇らしく掲げられているのですが、津山本では金色ではなく黄色の着色で済ませ、小纏に至っては紋も省略してあります。さらには、紋の下にある円筒形の籠目^{かごめ}の作り物も、BYU本では籠目の透け具合まで忠実に描いているのに対して、津山本では籠目こそ黒で線引きしてありますが、全体を黄色でベタ塗りしています（写真5・6）。その他、藩主の前後に並ぶ先箱・跡箱の箱の蓋に描かれた紋も、津山本では黄色のベタ塗りで省略されています。

描き方の相違

本の方がより省略されて描かれています（写真1・2・7・8）。それから、二番手・三番手で鷹口^{たかぐち}を手に持った12人の鷹を見る、津山本では火事羽織の下に着込んだ法被^{ほろひ}の柄が、先頭の2人以外は省略されています（写真9・10）。

それから、津山本には貼紙による修正箇所が見えます。単なる大きさやバランスの修正も見られるのですが、特筆すべき修正は徒および徒目付の服装です。BYU本を見ると、黒い鍔付きの兜をかぶり、黒の火事羽織を羽織って胸元には胸当が見えるのですが、津山本では当初、陣笠・火事羽織・胸当無しで描き、貼紙で修正したり修正の途中であつたりします。

それ以外にも、津山本では天地幅の異なる紙の継ぎ足しのほか、色の塗り残しやみ出しも一部に見られます。こうした修正や塗り残しはみ出しは、BYU本では確認できません。

内容比較のまとめ

以上の絵巻の内容比較をまとめると、次のとおりです。

I. 津山本では、継ぎ間違いによって二番手と三番手の後半部分が入替わっている。

II. BYU本に比べて、津山本は省略や修正が多い。

I については、おそらく作成後の保管上の不備によるものと思われる。



写真9：BYU本の二番手行列のうち鳶



写真10：津山本の三番手行列のうち鳶



写真8：津山本の藩主出馬行列のうち供頭騎馬



写真7：BYU本の藩主出馬行列のうち供頭騎馬

す。それに対してIIは、作成段階での仕上げ方の違いです。BYU本の方がより慎重かつ丁寧に仕上げられていることがわかります。津山本は下書として、BYU本より先に作成が始まったものと考えられます。

おわりに

二つの火消行列絵巻を比較してきましたが、今後の調査研究を進めるうえで、絵巻の作成時期や経緯の検討も欠かせません。火消行列絵巻を含む当館所蔵の松平家行列絵巻群は、おそらく全て明治16年から17年にかけて作成されたものと、現時点で筆者は推測^⑩していますが、さらなる検討が必要です。

また、松平家の火消行列絵巻を取り扱う以上は、江戸の大名火消全体の中で松平家が占めていた位置付けも把握する必要があります。こうした点を今後の課題と認識して、本稿を締めくくります。

注

①平成29年5月17日付の『朝日新聞』朝刊岡山版、『読売新聞』朝刊岡山版、『山陽新聞』朝刊社会面、『津山朝日新聞』夕刊一面、および翌18日付の『産経新聞』朝刊岡山版、同月23日付の『毎日新聞』朝刊岡山版に記事が掲載されました。
②詳細は後述しますが、外題が明記されているBYU本に対して、津

山本には外題が無いため、仮にこのような名称を与えています。

③BYU本の絵巻に付属するノートに、内容・寸法・購入日・購入先・購入価格が記されています。

④津山本は、やや硬い紙を裏打して表紙だけ付けた状態です。当館所蔵の松平家行列絵巻は、本稿の火消行列絵巻以外にも数種類あって、それらを収納する木箱の中に「津山藩行列下絵未表装」と書かれた封筒があります。どの図が未表装であったのか特定できませんが、津山本の現状の仮表装は、あるいは当館の前身に当たる津山郷土館の時代になされたものかもしれません。

⑤当館の特別展図録『行列を組む武士たち―津山藩松平家の行列図より―』（平成28年10月発行）31頁。

⑥津山藩松平家文書（当館所蔵・岡山県指定重要文化財。以下、文書名のみを記し、所蔵・文化財指定の表記は省略）E2―2―158「江戸日記」安政6年1〜6月。

⑦津山藩松平家文書D5―25「御家中之面々火事装束之粗」。この資料は、津山郷土館報第14集『津山町火消資料』（昭和56年9月発行）に、文字の翻刻と絵のモノクロ図版が収録されています。

⑧津山藩松平家文書C1―14「浅草火之御番御行列」天明3年4月。C1―16「御出馬御行列」

天明3年4月。C1―50「浅草御蔵火之御番御行列帳」文政12年4月。A1―33「諸御供立」のうち「嘉永五壬子年／浅草御蔵火之御番被為蒙仰候節／一番手方三番手迄行列并／御出馬御行列」。このうちC1―14とC1―16は同年月ですが、前者は一

く三番手の行列のみなので、この2点で一組の資料です。

⑨唯一の違いは、二番手の玄蕃桶と釣瓶の間に中間小頭がいるかどうかです。文政と嘉永の供立帳では、一〜三番手に共通して、この位置に中間小頭がいますので、おそらく絵巻作成時に描き忘れたのではないでしょう。

⑩前掲⑤の特別展図録の解説「津山藩主松平家の参勤交代と大名行列図の作成経緯」56頁。

《付記》最後に、アメリカに渡った火消行列絵巻の所在情報を知らせてくださった、ジャック・ストーンマン氏をはじめとするブリガム・ヤング大学の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

文化財めぐりの日程のお知らせ

5月21日に第112回の文化財めぐりを行いました、
本年度残りの2回の日程が決まりましたので、お知らせいたします。

第113回／平成29年10月28日(土)

第114回／平成30年 3月10日(土)

友の会会員の皆さま、どうぞ奮ってご参加ください。

津山市史全7巻を ホームページ上で公開しています

一部売り切れになっております旧版『津山市史』全7巻につきまして、
ホームページ上でPDFファイルにて公開をしております。
ダウンロードの方法は下記の通りです。

① トップページから「教育・普及」をクリック

② 次に「津山市史PDF公開」をクリック

③ それぞれクリックしてダウンロード
※実際には7巻分あります



博物館だより「つはく」
No.93 平成29年7月1日

津博
TSUYAKU

〔編集・発行〕津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

〔印刷〕有限会社 弘文社

入館のご案内

〔開館時間〕午前9:00～午後5:00

〔休館日〕毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月29日～1月3日)・その他

〔入館料〕一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。